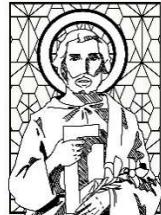




# ともに歩む

5号 2025年11月4日 カトリック土崎教会

発行者：篠崎 エジルソン c.tsuchizaki@gmail.com



労働者聖ヨセフ  
土崎教会の保護聖人

## ～神様と、共同体と、日々の暮らしの中で～

### 【待降節を迎えるにあたり — 共同体として歩む準備】

待降節（アドベント）を迎える私たちの共同体は新しい典礼の一年へと歩みを進めます。待降節は、主イエスの降誕を準備する期間であると同時に、私たち一人ひとりが「主が来られる場所を整える」時でもあります。クリスマスの喜びは、ただ日にちが来れば訪れるものではありません。心の中に光を迎える準備をするとき、そこにはじめて救いの喜びが生まれます。

待降節の典礼色である紫は、静けさと内省を象徴しています。私たちの日常は、忙しさや慌ただしさに満ちています。しかし、神は大きな声ではなく、静かなささやきや沈黙のうちに語られます。だからこそ、この季節は「沈黙の中に神を迎える時間」を大切にしたいのです。祈

りのひととき、聖堂での沈黙、移動の合間の深呼吸でさえ、どんなときにも神は働かれます。

また、何よりも待降節は「希望の季節」です。イエスは、明るく整えられた場所ではなく、貧しい馬小屋にお生まれになりました。それは、神が私たちの弱さと現実のただ中に来られることを示しています。私たちが抱える重荷、心の曇り、不安や迷い、そのすべてを避けずに、そこへ来てくださる方です。

共同体として、今年の待降節をどのように過ごしたいでしょうか。

私たちは「大きなこと」をする必要はありません。小さな思いやり、短い祈り、誰かのために時間をささげること。そうした小さな愛の行いが、救い主を迎える「ゆりかご」となります。

とりわけ、今年初聖体を迎える3人の子どもたち、洗礼を受ける2人の子

供たち、病と向き合っている方々、祈りと支えを必要としている方々を覚えて祈りましょう。共同体として「祈る」という支えは、目に見えなくとも確かに働きます。

「主よ、私たちの心にお生まれください。」この祈りを、共に歩む私たちの祈りとしながら、喜びと希望の待降節を過ごしてまいりましょう。

### 【王であるキリストの祭日 — すべてを支配する愛】

典礼暦の最後を飾る「王であるキリストの祭日」は、時間の終わりに向かう教会の一年の歩みを締めくくる重要な日です。この祭日は 1925 年、教皇ピオ 11 世によって制定されました。当時の世界は第一次世界大戦の惨禍から立ち直れず、人々の心は不安と分断に覆われていました。教皇はそのような時代の中で、「この世の真の支配者は権力でも富でもなく、キリストの愛である」と力強く宣言し、人々に希望を取り戻すよう呼びかけました。

この祭日は、キリストがすべての被造物の主であることを思い起こさせると同時に、「王である」とは何を意味するのか私たちに問いかけます。人間の世界での王権は、力や支配によって

成り立ちます。しかしキリストの王権は、徹底して「仕える愛」によって示されました。イエスは弟子たちの足を洗い、「あなたがたの中でいちばん偉い者は、仕える者になりなさい」(マタイ 23・11)と教えられました。十字架の上でご自分の命を差し出されたその姿こそ、愛による支配の最も完全な形です。

ヨハネ福音書でイエスは、「わたしの国はこの世のものではない」(ヨハネ 18・36)と言われました。その言葉は、キリストの国がこの世の制度や権力の中にではなく、心の中に築かれるものであることを示しています。そこでは暴力や優越ではなく、ゆるしと平和が支配します。キリストの王国は、武力による勝利ではなく、十字架の上の敗北のように見える愛の勝利によって確立されました。この祭日は、単なる教会暦の終わりではなく、「歴史の完成」に向かう希望のしるしでもあります。教会は典礼暦年の最後にこの祭日を祝うことで、すべての歴史がキリストに集約され、神の愛の計画の中に収められていることを告白します。どんな不安や混乱の中にあっても、最終的に支配するのは神の愛なのです。

私たちはこの日、外の世界の権力や成功ではなく、自分の心の中に「キリストの国」を築くよう招かれています。日常の小さな愛の積み重ねの中にこそ、キリストの王権が現れます。キリストの愛が私たちの思いと行いを導き、世界を支配するようにとの祈りをもって、私たちは再び新しい典礼の歩みへと出発します。主の王国は、遠い王国ではなく、愛と奉仕を通して今ここに始まっているのです。

### 【カテケジス Q&A — ミサに遅れたとき、聖体拝領はできますか？】

Q：ミサに遅れてしまったとき、聖体拝領を受けてもよいのでしょうか？

A：ミサは「言葉の祭儀」と「感謝の祭儀」から成り立っています。神の言葉を聞き、悔い改め、信仰を新たにしてから、感謝のうちに聖体を受ける。それがミサの本来の形です。ですから、理想的には最初から最後まで参加することが望ましいとされています。

けれども現実には、仕事・交通・介護など、やむを得ない事情で遅れてしまうこともあります。そのような場合、教会は「遅れた人は拝領してはならない」とは定めていません。もし「感謝の祭儀」

に間に合い、心を神に向けて十分な準備ができているなら、聖体拝領は可能とされています。聖体は、信仰と一致を表す秘跡だからです。

Q：どのくらい遅れたら拝領しないほうがいいですか？

A：たとえば「言葉の祭儀」をほとんど欠いてしまうほどの遅刻の場合、その日のミサで拝領することは望ましくありません。なぜなら、神の言葉を聞いて心を整え、キリストの体を受ける準備をすることが大切だからです。聖パウロは「信仰は聞くことから始まる」（ローマ 10・17）と教えてています。

Q：遅れてしまったとき、どうすればいいですか？

A：まず静かに心を落ち着け、「神よ、遅れてしまいましたが、あなたに出会う心を開いています」と祈りましょう。そして、次の機会には初めから参加する努力をしましょう。神は出席時間よりも、あなたの心の誠実さを見ておられます。

### 【こどもたちのまなざしに学ぶ — 初聖体の準備を通して】

この秋から、3人の女の子（8歳、10歳、12歳）が初聖体の勉強を始め、主

の降誕のミサで初めてキリストの体をいただく予定です。聖書や祈りについて学ぶたび、私は「こどもをイエスに近づかせる」という言葉の意味を、心の深いところで味わいます。

初めて顔を合わせた日、彼女たちは少し緊張していましたが、すぐに打ち解け、互いに助け合うようになりました。ノートを見せ合い、漢字の書き方を教え合い、分からぬところを丁寧に説明し合う姿。そこには「一緒に神さまを知りたい」という純粋な願いがあるように見えました。彼女たちはまだ小さいながら、信仰の学びを通してすでに「共同体」として歩み始めているのです。

子どもたちは、時に大人よりも深く福音を生きています。祈りのとき、そこにすでに「神の国」が息づいているように思えます。

彼女たちの初聖体の日、共同体全体がその喜びを共に分かち合います。私自身の祈りも、そして教会の皆さまの祈りも、この3人の上に注がれています。主の降誕の夜、彼女たちがキリストを初めて心に迎えるその瞬間、教会全体がひとつの家族として喜びに包まれるでしょう。私たちは彼女たちの信仰の

第一歩を見守りながら、共に感謝し、共に祈り、共に新しい希望を受け取るのです。

### 【洗礼を迎える二人の子どもたちとともに】

11月9日、私たちの共同体は二人の子どもが洗礼を受けるという大きな恵みを迎えます。洗礼は「教会に入る儀式」ではなく、神がその子に「あなたはわたしの愛する子」と呼びかける、神との出会いの瞬間です。二人はこれから、祈りや福音にふれ、キリストに倣って歩む旅を始めます。その旅は一人では歩めません。家庭と学校、そして何より共同体の支えが必要です。私たちは祈りと励ましをもって、彼らの成長を共に担う者とされています。

洗礼を「祝う」とこと「支える」ことは同じ信仰の働きです。ミサで祈り、声をかけ、見守ることは小さなことのようでも、子どもたちの信仰を深く育てる力となります。どうか、この二人の上に主の豊かな祝福がありますように。洗礼の日は、子どもたちだけでなく、私たち共同体全体が新しい喜びに招かれる日でもあります。共に祈り、共に歩んでいきましょう。